

も認められた。6) 視機能への影響は眼底腫瘍の部位・大きさ・二次的变化等に関連し、2例(2.4%)に視力予後不良な症例を認めたが、全身の重症度との関連は必ずしも一致しなかった。

結論

本症の眼科臨床的検索は、先天異常と腫瘍性病変を兼ね備えた疾患像を明確にし、眼底腫瘍の証明は、CT同様の有力な診断根拠となる。

29. RIA および EIA 法による Legionella 抗原測定の基礎的検討

(臨床中央検査部)

○大井 聖至・熊田 徹平・清水喜八郎

(ラジオアッセイ科)

地曳 和子・小田桐恵美・

出村 黎子・出村 博

Legionella 症の診断のために、RIA (Radioimmunoassay) および EIA (Enzyme immunoassay) 法により尿中の Legionella 抗原の測定を検討した。標準可溶性抗原は、Legionella pneumophila Philadelphia 1 の菌液を加熱殺菌後、遠心し、沈渣にリン酸緩衝食塩水を加え、4℃で保存し、遊離した可溶成分を用いた。抗血清は同一菌をホルマリン処理し、死菌とし、ウサギに免疫して作成した。抗血清は硫酸塩析、DEAE cellulose, Sephadex G-200 column により精製した。抗体は RIA ではクロラミン T 法により¹²⁵I で、EIA ではグルタルアルデヒド法によりアルカリホスファターゼで標識した。尿試料または標準可溶性抗原 500μl に抗体コートビーズ、精製標識抗体を加え、反応させ、洗浄後ビーズの¹²⁵I または酵素活性を測定した。感度、再現性、希釈試験などは、EIA に比較し RIA が優れていた。RIA では本抗体は血清型 1 型のみ特異的に反応した。モルモットに L. pneumophila Philadelphia 1 を 10⁸ cells/ml 接種し、経時的に RIA により尿中抗原濃度を測定した。標準株接種の 6 匹中 5 匹は、前値 1 unit/ml (1 unit は原液の 800 倍希釈) 以下から翌日には最高値の 20~190 unit/ml に上昇し、うち 3 匹は 8 日目まで 77~114 unit/ml 検出された。残りの 1 匹はほとんど上昇を認めなかった。臨床分離株接種の 3 匹は翌日死亡したが、全例で尿中抗原が 58~154 unit/ml 検出された。以上の検討により、RIA による尿中抗原の測定は本症の診断に有用と考えられた。

30. AT III 測定法 (ラテックス凝集反応) のルチン化への検討

(臨床中央検査部血液)

○小島 英子・中村恵美子

悪性腫瘍・感染症・血管障害などの存在により、引き起こされる DIC (Disseminated Intravascular Coagulation) は、適確な治療を逸すると、強い出血傾向を示し、死の転機をとることが知られている。

DIC の診断のパラメーターとしては、AT III の減少のみでなく、従来からの血小板減少、PT の延長、Fibrinogen の減少、Plasminogen の減少、そして FDP の増加等があげられている。これらの項目の中でも AT III の測定が特に重要視されるには、単に DIC の診断のみでなく、治療の指針にまで関与するためである。

上記のことを考慮し、以前より私共検査室では、AT III 測定法の検討を重ねてきた。

以前報告したバルチゲン法は反応時間が長く、ルチン検査には不向きであった。

次に行なった合成基質法は、前者に比べ測定時間、検体量共にルチン化に役立つ方法であるが、光度計を必要とし、前操作にやや手間どることがある。

今回検討したラテックス凝集反応は、操作が極めて簡単で、特別な器具を要せず、従来の方法に比べて簡便・迅速という点ですぐれ、ルチン化に最適と思われる。

この方法は半定量という弱点はあるが、DIC の診断・治療の指針に支障をもたらさないことを確かめ、ルチン化への適用について検討した。

なお、「健康正常人の平均値」、「バルチゲン法および合成基質法との相関」、「ヘパリン、AT III 濃縮製剤投与例」についても言及する。

31. 胃 X 線診断における粘膜像の検討

(胃小区の描出を中心として)

(第二病院 放射線科)

○石原 純一・木口 富恵・

田原 佳子・土谷 文子

胃 X 線検査に際し、より精細に変化を描出することが望まれるものとして、粘膜像が第一に挙げられる。すなわち内視鏡所見、切除標本における肉眼的所見などに、より近似した X 線像を得ることは病変の評価をより正確なものにするし、また、より微小な病変、特に早期胃癌病巣発見成績の向上にもつながりを生ずるが、反面、スクリーニングに重きを置かれることが多い日常診療としての X 線検査においては、果してどの程度このような要求を満たし得るかの懸念もある。この場合、粘膜面評価の指標としては皺襞像と胃小区像